

# BOOK GUIDE

## 今月のブックガイド

### 「私」を壊す力、「私」を生きる力

黄金色の日差しを見据えるように、草の茂る土手を進む。ぐんぐん歩く。

やわらかさと力強さが伝わる表紙の写真は、著者である山本潤さん。そして、表紙の帯には『加害者は、父』。本書は、山本潤さんが13歳から7年間、父親からの性的虐待を受けた体験と40代を迎えた現在までの生活を記したものである。

寝ている娘の布団に入り、体を触る父親。子どもにとって、それは理解できない体験である。何が起きたのかわからずに、「身体が引きちぎられ、ばらばらになっていく」感覚だけが鮮明に残される。心のなかは言葉にならない恐怖に満ち、世の中は危険なものではない。「安全と危険、愛と侵略の区別がつかなくなってしまおう」という混乱のなかで、子どもは自分がおかしくなったのだらうと考える。そして、おかしい自分を周囲に知られることを恐れるようになる。

思春期から成人になるまで、一人きりでこうした恐怖を抱えて過ごした日々は、あまりにも長い。本来ならば心も体も成長していくこの時期に、「私の時計は13歳で止まってしまった」と語る彼女は、まるでコトリとも音を立てない時計のように、感情も感覚も麻痺させて生き抜いてきたのだらう。

父親と離れて母親とともに暮らすようになってからも、「安全」を取り戻せたわけではなかった。性的虐待を母親に打ち明け、「もう終わったんだ」「解放されたのだ」と安堵したのも束の間、母親の驚愕した様子を見て激しい罪悪感に苛まれる。被害を打ち明けられなかった自分が、まるで「共犯者のような」気持ちにもなり、慌てて自分の気持ちに蓋をする。そうして被害の記憶を沈め、解離させようとするほど、退行や強迫症状、さまざまな身体症状が噴出する。それ



### 13歳、「私」をなくした私

性暴力と生きることのリアル

山本 潤著

朝日新聞出版

定価 1400円+税

からの日々は、性的虐待を受けていた年月よりも長い。

性暴力のリアルは、体に触れられることの恐ろしさ、おぞましさだけではない。その後を生きる日常の苦しみこそが、性暴力のリアルである。「無感覚で空っぽな感情、男性というだけで恐怖心がわき上がってくる心、自分が生きているか死んでいるのかもわからない凍りついた感覚」とともに、生きていくこと。痛みを感じられない“痛み”のなかで、それを麻痺させるためにアルコールに溺れ、父親との違いを確認するために1回限りのセックスを重ねる。それによって性的虐待と同じような状況を引き起こし、“あの時”できなかった戦いに挑むかのようなトラウマの再演を繰り返しながら、それでも彼女は、少しずつ虐待的ではない新たな関係性を体験していくことができた。だが、それは決して楽になることでない。むしろ、“痛み”を痛みとして感じられるようになるための道のりだったといえよう。

性的虐待を受けることのさまざまなリアルが、ここにある。性暴力が壊したのは、「私」だけでない。性暴力は、彼女と母親との関係も深く傷つけた。理不尽だとわかりながらも「助けてくれなかった」母親への怒りが沸き上がる娘と、「娘を守ることができなかった」無力感と自責感に苛まれる母親。もともと身近で寄り添う関係でありながら、互いが性的虐待を思い出させる引き金になってしまうという葛藤と苦しみ。母子の間に横たわる「父がした性暴力」という壁を、ふたりが少しずつ取り払っていった20年以上にわたる日々は、母子を「とっても特別な母子」にしたという。山本潤さんとお母さんは、ふたりで「私たち」を取り戻したのだらう。いや、“戻った”のではなく、その先へと歩み出している。

ぐんぐんと歩く彼女の姿は、だから、あたたかくて、勇気に満ちている

(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)